
魚ガール！

あくた咲希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魚ガール！

【Nコード】

N6194Y

【作者名】

あくた咲希

【あらすじ】

俺が出会ったのは、魚をこよなく愛する少女だった。そんな彼女と洞穴で見つけた変な生物、彼女曰く「テイクターリク」。テイクターリクは、魚類と両生類のミッシングリンクだというのが……？

(連載全4回)

運命の出会いというものを、俺はそれまでついぞ実感したことがなかった。

――、が。

少し前を歩く女の子が、ショルダーバッグのポケットからハンカチをとりだしたとき、はずみで落っこちたそれに、俺は何気なく目をとめた。

本当に何気なく、だったんだ。たとえばポケットティッシュだったら、そのまま素通りしていたに違いない。拾ってあげるなんてアクションは、初対面の人限定だが極度の人見知りである俺にはありえない。

そんな俺が、歩みを止めて、しかも腰をかがめてまで拾った、彼女の落し物。歩道のアスファルトから浮き上がるようなそれは、蛍光色のオレンジと黄色がまばゆい、親指の先ほどの大きさの玉ウキだった。

「あのっ！ 落としましたよ」

ほとんど勢いで声をかけていた。こんなことは初めてだ。振り返った彼女と何を話したらいいかとか考えずに、よもやとびきりの美少女だったらしいなあとか期待することもなく、ただ、反射的に呼び止めた。

だから、

「ありがとうなのだうお！」

とかなんとか、よくわからない音が語尾についたお礼の言葉が真夏の日差しとともに飛び込んできても、即座には対応できなかった。「うっかりここに入れたままだったんだあ。拾ってくれてありがとう」

「……、うお？」

「やだあ、うお、なんて言っていないよお」

女の子は手をひらひら振りながら照れて笑うと、落っこちそうに

大きな目をくりくりさせて俺を見上げた。

メバルみたいだなあ、と俺は彼女を見つめ返しながら思った。メバルはカサゴ目フサカサゴ科、この春先の堤防でもたくさん釣れた魚だ。さすがにあそこまで目は飛び出ていないけど、女の子はそれぐらい印象的な目をしていたということだ。

「ん。この匂いはっ」

女の子は小さな鼻をひくつかせて、俺の胸のあたりを嗅いだ。

俺はというと、異性とここまで接近したことがついぞないので、すっかり硬直しきっていた。

「海の近くに住んでるの？ 魚屋さん？ それとも、釣りキチさんかなあ？」

その通り釣りキチです、と答えようにも声が出ない。

女の子は玉ウキをバッグの中のポーチにしまい、

「わたし、引越してきたばかりなんだ。もし釣りをする人なら、ポイント教えてね？」

そのあと自己紹介をしたような気がするが、俺はすっかり聞き逃していた。かわりに、彼女の髪が身動きのたびに揺れるのとか、ほんのり色づいた唇がカワハギみたいにちっちゃいなとか、ほっぺたがつるつるしていて手触りよさそうだなとか、考えていた。

やがて、反応のない俺に愛想を尽かしたらしく、女の子はじゃあねと苦笑して、曲がり角に姿を消した。通りすがりのおじさんが、でかい図体で道の真中にしゃがみ込む俺に、憐れみの視線を残しつつ去っていった。

……異性の釣り仲間ができようかってのに、俺は！ 俺は！！！
情けなくて涙が出た。がっくり項垂れる。

なんて名前の子だったんだろう。どこに住んでいるんだろう。このあたりなら同じ高校かもしれない。とはいえ夏休み中だから転入生がいるかどうかかわからないし、隣町には私立のお嬢さん学校だつてある。そもそも中学生かもしれないし。

人生初ともいえる——しかも俺の十六の誕生日目前、神様のプレ

ゼント的な「出会い」を不意にしてしまった俺は、予定していた夜釣りに出かける気力もなく、タオルケットにぐるぐるくるまって早寝した。

そして、夢を見た。タイやヒラメが舞い踊る、竜宮城の夢。

巨大メバルに腰掛けた乙姫様は、俺に「大事な玉ウキを拾ってくれてありがとうなのですうお」などと言い、紐のゆるんだ玉手箱をよこした。玉手箱は受け取った瞬間にたちまち白い煙を立ち上らせ、竜宮城を包みこむ。

煙が立ち消えるのと同時に、俺の前にあったものはすべて消え失せてしまった。

意外にも目覚めは悪くなかった。網戸越しに差し込む光は白く眩しくて、今日もいい天気だと告げている。

シャワーをさらっと浴びて着替えて、南向きの勝手口から外に出ると、磯の風がぷんと香った。潮だまりで繰り返される生物の生と死と、打ち上げられた海藻の匂いだ。俺は赤ん坊の頃にここに流れついて（とはまあ、ふつうに考えて母親の作り話だ）、十六になる今の今までずっと海男である。

うちの家系はずっと漁業にたずさわっていたらしいが、俺が物心つく時分にはすでに一般のサラリーマン家庭だった。ひいばあちゃんとはあちゃんだけが、シーズンに岩海苔を集めるぐらいなもの。岩海苔は、卸先の道の駅では人気らしい。

ここらでまだ漁師をやっているのは、目前に広がる海の右側に突き出した、小さな岬を越えたところの数軒のみである。みんな老齢なので、俺や近所の若いモンが時々手伝いにいく。跡を継ぐかといえど別の話だが、この界限から漁業がなくなるのは寂しいと思う。潮風に吹かれながら、ごろごろした石と砂の坂道を駆けおる。

左手が砂浜になっていて、右手が磯だ。俺は磯を目指して歩く。履き古したビーサンはこなれていて、ちっとやそっとでは滑らない。軽やかな足取りで、岩に囲まれた潮だまりにたどりつく。

フジツボがくつついた平たい岩にしゃがんで、透き通る海水をのぞき込んだ。まだ太陽に照らされていない、静かな箱海——このお気に入りの潮だまりを俺はこう呼ぶ——がそこにあった。貝殻のかげらや、ちびハゼなんかを抱き込む細かな底砂に、珍しい漂着物が混じっていないかどうか確かめるのが引き潮の日のならいである。ここのところハズレつづきだったから、誕生日の今日こそは何か面白いものが見つかるといったと思った。

期待しつつ、そっと水に手をひたした。ハゼたちがぱっと放射状

に逃げてゆく。砂の中を探してみる。水がふわあと白く濁る。

指先にころんとしたものが触れて、砂ごとすくい上げてみた。指の隙間から水と砂が流れ落ち、てのひらに少しの砂と、それが残った。

蛍光色のオレンジと黄色の、親指の先ほどの玉ウキである。

正直よくあるウキだし、これまでも流れついていることがあったけれど、今日の俺にはもはや昨日の女の子しか連想できなくて、ウキを握り締め、すぐさま踵を返した。

釣り好きな子なら、町の釣り道具屋を張っていれば会えるはずだ。海岸の町なので店は多いが、釣りキチの俺にとってはどこも顔なじみである。活き餌の仕入れ状況を訊くついでを装い、さりげなく来客の顔ぶれを尋ねればいい。

家に戻り身支度をして、駐車場のシャッターを開けてチャリンコを引っ張り出してきた。いつもは歩きだが、店をハシゴする以上チャリのほうが好都合である。うっかり買い物をしてしまうかもしれないし。

段切り替えもついていないママチャリは、埃をかぶってダサさMAXだ。ぼろ布で適当に拭いてからまたがる。ペダルを踏むと、最初はじゃりじゃりと危ない音を立てていたが、そのうちに気にならなくなった。

少し前に舗装された道はすこぶる快適だった。歩いているとわからないが、坂道で受ける風は、排気ガスが混じっていなければなかなかのものだ。

しばらくは海岸沿いを走っていたが、やがて右に折れた。畑の間の砂利道を抜けると、アーケードの入り口が見えてきた。早い時間とはいえさびれた商店街に人通りはなく、チャリンコで疾走しても咎める者はいない。

途中、昔は三軒あったうちの一軒の、老舗の釣り道具屋をのぞいた。

いかついオヤジが奥の座敷でたばこの煙をくゆらせている。死ん

だじいちゃんの友達で、俺は小さい頃から出入しているから平気だが、まず一見の客は引き返してしまう。昨日の女の子も例外ではないだろう。もとより、こんな繁華街から外れたところにある店になど、引越してきたばかりの人間がくるはず――な、い？

「あ」

「あ」

見事に同時だった。

重なった声に、オヤジが太い眉を片方つり上げた。

「よう、二見の小倅」

「こんにちは」

挨拶もそこそこに、仕掛けやらハリスやらが陳列された棚の前にちんまりとたたずんでいた女の子のそばに寄った。彼女は俺を覚えていてくれた。

「昨日の、オイスターくん」

そう言って、肩をすくめて笑った。

「オイスターって？ 牡蠣？」

「無口な人って意味。こないだ辞書で見たの」

「昨日はごめん、無視してたわけじゃないんだ」

「うん、緊張してくれてたのよね」

凶星を指されて、俺は顔に血がのぼるのを感じた。

女の子は大きな目を垂れて、

「わたしは津々井可南^{つづいかな}。ちっちゃい頃から魚が好きで、釣りも数年前からはじめたの」

おそらくあだ名は「さかな」かなんかだろうな、と俺に思わせるのにはじゅうぶんな自己紹介だった。小柄な彼女は、俺を見上げて口をすぼめる。今度は俺の番だ。

「俺は二見甲斐^{ふたみかい}。あっちの海辺に住んでるんだ。よかったら、これから釣りにいく？」

平静を装っていたけれど、実は背中汗だくだった。

女の子を、つ、釣りに誘ったー！

「うん、行く行く!」

可南は顔をほころばせ、ぴよいと跳ねた。

ちよっとサイズがでかすぎてバランスが悪いかなと思っていた目も、見慣れるとすごくかわいい。うわ、俺、恋しちゃってるかも? ふと気づくと、どぎまぎしている俺をじとーっと見つめる視線があった。店のオヤジである。たばこを灰皿に押し付け、座敷を降りてきた。

「昨日から東の波止でイワシが群れとる」

オヤジはエサ釣りの棚から、パッケージをひとつかみ抜き出し、可南に渡した。

「アミは外に置いてある。釣り方はこいつが教えてくれるだろ」

そう言うのと、またさっさと奥に引っ込んでしまった。代金を受け取る気配はない。女の子の来店が嬉しかったのか、気前のいいことだ。

俺たちはオヤジの後ろ姿に向かって、ありがとうを言った。

「よし、とりあえず竿とか取りに帰らなきゃ。チャリの後ろ乗って」店の入り口で備え付けのポリ袋に、大量のアミエビをコンクリートブロックみたいに固めて冷凍したやつを二つ入れながら、まだ店内をきよろきよろしている可南に声をかけた。

「あ、えっと、わたし竿を買わなくちゃ」

「引越して持ってこなかった? いいよ、俺の貸すよ」

「えと、アミはどこ?」

「アミはもう入れたよ」

「どこ?」

「どこって、これ?」

冷凍アミの色である、ピンク混じりの生臭い水がしたたるポリ袋を掲げると、可南は目をますます丸くした。

「それがアミなの?」

「え……うん、アミアビ」

「エサのことだったのかあ」

可南は感心したようにこちらに歩いてくる。

そうか、アミ↓網か。

釣りで使う網といえばタモだ。俺のは、じーちゃんが使ってたやつを補強して、さらに柄を足したオリジナル品である。根性の入った釣り人はタモを自作するものだ。

「ちっちゃいんだねえ。これ、針につけられるの？」

「いや、これ撒き餌だから……。もしかして、サビキやったことないんだ？」

「サビキ」

はっとして、可南は手元のパッケージを見た。でかかど「サビキ」と書いてある。釣り針に、魚のエサを模した薄い緑色のビニール片がくっついたシロモノだ。

彼女の様子からすると、やはりサビキ釣りをしたことはなさそうだ。そりゃ、場所によって釣れる魚は違う。俺は釣りキチでも海釣り専門で、ブラックバスやアユなんかは狙ったことがない。だから、サビキを知らなくてもおかしいことではない。

しかし、可南はひどく恐縮したらしく、

「あの……、ごめんね？ わたし、自分でエサもつけられないの」
とくに珍しいことでもないだろうに、もじもじして俯いた。

「お父さんか誰かと釣りに行ってたんだろ？ うちの従妹もそんなだよ」

従妹の場合は、まさに「魚を釣る」だけの「釣り」だったが……。ひとりきりで釣り道具屋にくるぐらい、やる気があるのだ可南は。そこは、誇っていいところだと思うぞ？

「俺、一通りの海釣りのことなら教えてやれるから。元気出していこう」

「ありがとう、なの……」

せっかく笑顔が戻りかけたのに、可南はまた俯いた。

今、また、語尾に何かつけようとしなかったか？

昨日もごまかしていたことからすると、本人は隠したがっている

ということか。方言とは思えないけど……、追求しないほうがいいだろう。ふだんはふつうの言葉でしゃべっているのだし。

可南を荷台に乗せて、きた道を引き返した。

風に潮の香が混じりだすと、後ろで可南が深呼吸をしたのが感じられた。控えめに俺の胴体に腕をまわしている。ちらと振り返ると、彼女の黒髪が乱れ、なびいているのが見えた。薄手の長袖パーカーのフードがふにやふにやしている。スカートの裾もはためいて、太ももが見えた。その後の上り坂は根性でクリアした。

玄関前の生垣のそばにチャリンコを止め、可南に陰で少し待つよう言い置いてから家の中に入る。両親は仕事でいないが、ひいばあちゃんとばあちゃんが窓を開け放した居間でくつろいでいた。俺を目ざとく見つけると、すかさず声をかけてきた。

「甲斐やあ、こっちきておまんじゅう食べんかね」

「甲斐、弁当あるで、持っていきや」

ひいばあちゃんとばあちゃんは血が繋がっていないが、性格がおっとりしているところが似ていて、仲がよい。近所の人でさえいまだに、嫁姑の関係でなく本当の母娘だと勘違いしていると思う。

朝めしを食べていなかったことを思い出して、ひいばあちゃん定番の蒸しまんじゅうをひとつ口に放り入れた。いつ作った品かわからないので、可南に持っていくのはやめておく。

ばあちゃんの弁当は台所のテーブルに置いてあった。今日は包みがふたつ。ばあちゃんとはときどき昔の癖がでて弁当をふたつ作る。俺のと、死んだじいちゃんのぶんだ。かつて夏休みといえば、じいちゃんと曰があくことなく釣りに行ったもので、いつもばあちゃんの弁当を持参していたのである。

じいちゃんのぶんは、いつもなら海べりの墓に備えたあと、俺の胃袋におさまるわけだが、今日は可南がいる。ばあちゃん、グッドタイミング。知り合ったばかりの可南をいきなり墓参り付き合わせの悪いけど、うちの墓は東の堤防に行く途中にあるから線香だけあげていこう。

冷蔵庫から塩水で作った氷と、ペットボトルのお茶を出して、常に台所にスタンバイしているクーラーボックスに入れた。俺愛用ナイロンのボディバッグには、弁当と紙コップ——はどこにあるのかわからないので、食器棚にあったプラスチックコップをふたつ持っていくことにする。

ばーちゃんズに行ってきましたをして、俺は外に出た。待っていた可南と目が合うと、彼女はホッとしたように駆け寄ってきた。

「ごめん、もうちょっと待ってな」

釣り道具は出しっぱなしにしていると叱られるので、毎日律儀に庭の物置の中である。可南もついていくというので、一緒に駐車場の裏にまわる。

「か——津々井さんは、軽いのがいいかな」

竿を物色しながら呟いていると、

「可南でいいですよー。同い年ぐらいでしょ？ 高校生？」

尋ねられたので、高一の十六歳だと答えた。案の定、可南も同じ学年だった。

彼女はリール付きの竿を扱ったことがないらしいので、伸ばせばニメートル弱の延べ竿を選んだ。ちょっととした釣りならコンパクトなものの方がいい。俺も同じぐらいの長さのにした。こちらはリール付きである。

さて、ひとりなら歩いていくところだが、今日は荷物をチャリに乗せたり、くくりつけたりして、ようやくの出発となった。

ぎらぎら照りつける太陽光のもと、俺たちはチャリを真ん中にして歩いていく。東の波止までは三十分かかるか、かからないかである。途中で漁港を通り過ぎ、墓参りをして、おか陸側に小高い山を仰ぎながら歩いた。

そのあいだ、ずっと可南の話を聞いていた。まさに「さかなちゃん」だ。魚を愛でるのも、食すのも、育てるのも好きらしい。俺はといえば釣る魚以外にはそんなにも興味がなく、横文字の魚名を聞いてもピンとこない。それでも可南はめげることなく、その魚のこ

とを的確に表現するのだった。

波止には、平日とはいえ夏休みなので、けっこうな数の釣り人がいた。年齢分布は極端で、若者と年寄りのみ、である。昔の俺とじいちゃんみたいな組み合わせがそこかしこで見られ、懐かしい、ちよつと淋しい気分になる。

じいさんが釣り上げるキラキラした小魚たちを見て、こどもたちが歓声を上げた。バケツを覗き込んで動かないこどももいる。すぐ食べたい、なんて言い出すやつもいる。慣れない手つきで竿を扱っていたり、ちびっちゃいイワシでも大騒ぎしながら両手でつかんだり、うっかり海に逃がしてしまって悔しがったり、しきりに数を数えて自慢していたり。これだけ賑やかな釣り場はサビキの時期ぐらいなものだ。少々こどもたちがうるさくしていても、逃げるような魚はいない。怒る大人もいない。

可南は珍しいものでも見るように、目をまんまるにしてキョロキョロしていた。沖合にフェリーを見つけて俺に教えてくれたり、幼稚園児らしき男の子がっぱしに釣りをしていると感心したり、海面が魚の群れで銀色に波打つのを幻想風景でも眺めるかのように見つめていたり、こちらがなんだか得意げになってしまいうリアクションの数々だった。

「本物の海を見るのは初めてなの」

俺が勧めた折りたたみ椅子に腰掛けながら、可南ははにかんだ。すべて用意のすんだ竿を受け取ると、片手で三連の仕掛け針をつけた部分のハリスをつまんで、ひょいっと海に向かって投げる。それがぼちゃんと海に落ちると、またたくまに小イワシが食いつきにやってくる。

可南は慌てながら竿を上げ、引き寄せた。銀びかりする魚たちが、彼女の顔にびちびちと水しぶきを飛ばした。

「あはっ、すごいすごい」

底抜けの笑顔になって、可南は三匹のうちの二匹を素手でつかもうとした。てのひらに細かいウロコを残して、つるりと逃げる魚に、

また笑う。

「今んとこアミ撒かないでも釣れそうだな」

俺はぼろ布で小イワシをつかみ、魚の口を刺している針を外してクーラーボックスにぼんぽんと放り込んだ。こんなにすぐ釣ってしまうとは思わなくて、まだ海水を汲んでいなかった。ロープ付きの釣り用バケツを海に投げ込み、すくった海水をクーラーボックスにそっと注ぐと、跳ねていた小イワシがすぐに動かなくなった。釣った魚はこうして締めて、鮮度を保つのだ。

その後も入れ食い状態で、俺は自分の竿をだすどころではなかった。可南が楽しそうにしているので、途中で代わるよーと言われたが辞退した。彼女自身も遠慮はしつつ、爆釣りの快感に酔いしれているようだった。一口サイズの小イワシでも、いっぺんに数匹釣ればそれなりに手応えがある。

せっかく釣り屋のオヤジから貰ったアミをどうしようかと考えていたら、隣のこどもがアミを入れたバケツを海に引っくり返してしまった。悪気はなかったんだよな、俺もやったことあるんだよなあ、とほろ苦くなりながらうちのを一袋、押しつけた。泣きべそをかきながら、じいさんに礼を言わされているこどもがいじらしい。

休憩もせずに釣りつづけていたら、昼にはもうクーラーボックスがいっぱいだった。周りでも帰り支度をする釣り人がちらほらいた。みんな大漁で顔がほころんでいる。可南も、

「これ、まるごと食べられちゃうよねっ！ さばくの手伝うお」

上機嫌で、妙な語尾をつけたことにも気づかない。魚の、「うお」だよな？ もしかして、そういうキャラを目指しているのだろうか？

後片付けをして、クーラーボックスの底から水を抜いて肩からかけた。かなりの重さだ。日焼け肌へのストラップの食い込みが半端ない。

波止をあとにして、弁当を食べられる日陰を探した。きた道を戻り、山のふもとに少しひらけた場所を見つける。人為的な古い横穴がいくつかあり、怪しい雰囲気ではあったが、その手前の野っ原は

綺麗だった。クロマツが何本か植わっていて、その陰に俺たちは腰をおろした。

「本当にわたしがいたでいてしまっていていいの？」

どでかいおむすびが二個とたくあん、玉子焼きだけの弁当に可南は感動しきりで、そんな弁当をごく当然のものとしか捉えていなかった俺は、考えを改めなければいけないと思った。死んだじーちゃんを懐かしむように、いずれこの弁当を恋しがるときもくるのだろう。年のために味覚障害が起こりはじめたばーちゃんの玉子焼きはしょっぱすぎて、うっかり涙腺が刺激されそうになる。

俺が弁当を平らげる頃、可南はようやくおむすびを一つと、二切れのたくあんを食べ終えたところで、しんみりとした雰囲気であぬくなったお茶をすすっていた。

「わたし、こっちの学校でうまくやっていけるかなあ」

聞けばやはり、俺と同じ高校に転入してくるそうだ。お母さんのお母さん、つまりおばあさんの具合が悪いらしく、その介護のため引越してきたらしい。

「甲斐くんと同じクラスだったらいいな」

「そそうだな」

思わず舌を噛みそうだった。そんなことを女の子に言われたら、誰だって焦るんじゃないか？ 同じクラスがいい——なんて。深い意味はないだろうけど、それでも頼ってくれているのだから悪い気はしない。

「うちの学校、二クラスしかないから確率半々だしさ。もし別になっても合同授業が多いし。すぐ慣れるって」

元気づけてみる。可南はちょっと癖はあるけどカワイイ部類だし、うちは男子の割合が多いし、女子ウケはどうかしらないけど、ふつうに暮らしていくぶんには大丈夫だろう。女で釣り好きっていうのも、この町じゃ珍しいわけでもなし。

しかし可南は苦い顔をして、小さく唸った。

「わたし、ね……。変じゃ、ないよね？」

「変？ 何が」

「その……」

言いにくそうにしている。何かとんでもない秘密を抱えているのだろうか。それか、トラウマか。

トラウマ……、か。俺はいつも「磯くせえ」とか「さかな小僧」とか口さがないやつらに言われていたから、初対面の人間に会うときはひどく緊張する。いたってふつうのつもりだが、周りから見たらどうなのだろうと鬱になるときがある。

くわえて俺は体がでかい。正しくは、ここ数カ月で一気に伸びた。もう誰も俺をいじめようってやつはいないが、かわりに女子に恐ろしがられるようになった。最近のあだ名は「海坊主」である。ちょっとおしゃれに目覚めて髪の毛を逆立ててみたら、上級生にまでビビられた。

「あー……、俺とつるんでたら、友達できない……かも」

自分で言いながら凹みそうになる。漁師のおっちゃんとか釣り道具屋のオヤジとか、そういう知り合いなら増えるけど。あと、ばーちゃんの友人とかな。

すると可南は、玉子焼きでむせながらのたまった。

「甲斐くんが、友達に、なってくれるなら、ほかに友達いなくても、平気」

う、あ。これ、どう反応したらいい？ 喜ぶべき？ ほかにも友達つくと諭すべき？ それとも、どうしてそんなに謙虚なのかと問いただすべき？ いったいどんなトラウマ抱えてるんだ。

俺が返答せずにいると、可南は二個目のおむすびにかじりついた。そのまま米をかじり取るでもなく、拗ねたような視線をこちらへ向けてきた。

俺は慌てた。

「じゃ、じゃあ俺は友達一号ってことで！ よろしくなっ」
できるだけ明るく言ってみたつもりだ。

が、可南は何かしら不満だったようで、無言でおむすびを食べつ

づけた。

沈黙の時間が流れる。ヘタに何かを言うより、静かにしていたほうが得策か。

俺は伸びをして、草っ原に寝転がった。マツの尖った葉の向こうを、厚く白い雲が流れている。一羽の鳥が時々、甲高い声で鳴きながら、大きく空を旋回する。

身近すぎる海を見て思うことはないのだが、広い空を眺めていると自分の存在の小ささを考えることがある。自分以外の人間のも。俺たちは小さくて、手の届かない空を当然あるものとして日々を生きている。空は本当にそこにあるって、確かめたことなんてないのに。

俺は寝返りを打った。草の匂いが鼻のすぐそばにあって、むせた。むき出しの肘を、やわらかな地面が受け止める。頬杖をつき、なんとはなしに横穴のひとつをじっと見つめた。

ふと、横穴で何かがうごめいた気がした。人ではない。もっと小さな、何か。

「……どうしたの？」

怪訝そうに可南が見下ろしてきた。弁当は平らげたらしい。タッパ―を布巾で包み直し、ごちそうさまと言う。

「なあに？ あそこ？」

俺の視線をたどり、いともたやすくソレを見つけた。そして、「テクターリク……？」

不思議な言葉を発した。俺にはとっさに反芻できない単語で、ぽかんとする。

可南はひどく機敏に立ち上がり、ソレに向かって走り出した。遅れをとった俺だが、なんとか途中で追いつく。

横穴は、可南ならば腰をかがめることなく入れるだけの高さがあった。ソレはもう入り口付近にはおらず、正体を突き止めるには暗い奥へ進まなければならなかった。

躊躇する俺たちを急かすように、背後から風が吹く。

「いきましよう」

押し殺した声で可南が言う。ものすごく思いつめた横顔である。よっぽどそのティクなんとかというものが重要なのだろうか。俺に「見間違いか気のせいなんじゃ」と言わせない気迫に満ち満ちている。

日が高いぶん、横穴はいくらも行かないうちに光が届かなくなつた。そう深くないはずだが、ちびちび進むせいでなかなか行き止まりにぶつからない。

ほとんど視界がきかなくて、息が詰まり、いつのまにか可南が俺の手を握っていたことにも気づかないほど俺は緊張していた。そのくせ、サンダル足が何かぐにゅっとした弾力のある何かを踏みつけたことは、稲妻のごとく全神経を戦慄させた。

「うわわわわわ」

みつともなく慌てて、その場を飛び退こうとして失敗すると、可南も一緒に尻もちをついた。己の情けなさに、謝る言葉すら出てこない。

先に可南が起き上がって、俺を引っ張った。

「いま、水の音がした」

暗がり慣れた目で見上げると、彼女はその顔に笑みを浮かべていた。興奮した、ニヤリという擬態語が似合う類の笑みだ。

もはや横穴というより洞穴といったほうがいい。近所にこんなところがあるなんて知らなかった。入り口になんの立て看板もなく、柵もなく、うっかり入って迷子になることもいそうだなこれは。

さらに奥を見つめたまま、可南は俺をつかむ手に力を入れた。彼女としても気は逸っているようだが、まったく恐ろしくないわけではないらしい。

男の俺が尻込みしてどうするんだ、と自分で自分を鼓舞する。手を握り返し、覚悟を決める。

数歩も行かないうちに水たまりにさしかかった。深くはない。くぶしあたりを水面がくすぐり、外の日差しであたたまっていた体

をじわじわ冷やしてゆく。潮の匂いはしない。これは真水だ。湧き出しているというよりは、雨がたまったかどうかしたんだろう。

今度は踏みつけはしなかったが、また足が何かに触れた。

ソレは緩慢な動きで水中を徘徊しているようだ。そうつと、サンダルからのぞいたつま先でなぞってみる。かなり、でかい。そして、どうやら鱗らしきものがある。

魚か、と思うと、少し安堵した。しかしすぐに、先ほどソレを踏んづけたのは水中でなかったことを思い出す。

「いや。いやいや。同じやつだとは限らないし」

「いたの？」

可南が、俺の足元を覗き込もうとした。

時を同じくして、恐らくその魚と思われる物体が、俺のスネにかみついてきた。ガブリとやられた。目視できないが、かなり、でかい口であろうと思われる。

声にならなかった。

俺はソレを左足にくつつけたまま、可南の手を引いて洞穴の外へ全速力で引き返した。

日のもとで見たソレは、魚っぽくはあったがとても魚とは思えないシロモノ、謎の生き物だった。俺は今度こそ悲鳴を上げた。

「甲斐くんー！ 落ち着いて」

そういう可南もおよそ冷静ではなく、ぱくぱくと口を動かしてはソレと俺とを見比べた。ソレはまだ俺にかじりついていて、きつとスネには血が滲んでいると思う。早く引きはがさないと食いちぎられてしまいそうだ。

決死の覚悟でソレの胴体に手刀をくらわした。しかし、厚い鱗にいても簡単に弾き返されてしまう。両手でつかんで力任せに引き離そうとしても、俺が痛いだけでびくともしない。

ああ俺もここまでか。死を意識してボンヤリしていたら、可南が拾ってきた枝を俺の足とソレの口の隙間に差し込み、えいやつと斜めに倒した。テコの原理でソレは吹っ飛んでいき、草の上にごろん

と横たわる。

「あ、ありがと可南」

なかば放心状態で俺は礼を言った。

だらだらと流れる血がサンダルを通り越して地面を濡らす。とりあえず、イワシの鱗や血が染み付いたボロ布で傷口を押さえた。熱気の中、匂いが入り交じってすごいことにんり、思わず咳き込む。

可南はといえば俺を放ったらかしで、草むらにしゃがみこみ、一メートルは余裕であろうかという深緑と茶を混ぜたような色の物体を熱心に見つめていた。こちらには気づいてくれなさそうだったので、血が止まったところで俺も可南の隣へ行き、腰をかがめる。

見れば見るほど正体不明な生き物だった。頭は扁平で、ワニみたいな口をしている。首から下は鱗があって魚のようだが、もったりとしたヒレが二対、まるで足のように生えている。言うなれば、胴体部分と足だけが魚のワニだ。

「ティクターリク？　ほんとに？」

可南が恐る恐るソレの横っ腹をつつき、またティク……と呼んだ。外国の魚だろうか。俺が頭の周りに疑問符をいっぱい浮かべていると、可南がようやく説明してくれた。

「ティクターリク・ロゼアエ。デボン紀後期に、はじめて陸に上がったとされる魚」

「デボン……紀。それって、かーなーり、大昔のことじゃ」

俺の記憶が正しければ、地質時代の古生代、カンブリア紀↓オルドビス紀↓シルル紀↓デボン紀。恐竜が現れる中生代よりも前の時代だ。

「うん。魚類の時代とも呼ばれてる頃のことね。その終わりあたりに、ティクターリクという生物が出現したらしいの。化石が見つかったのはここ数年の話」

可南は抱いた膝に顎を乗せて、唇を尖らせた。

「それがこんなところにいるなんて、変よね。魚類と両生類の貴重なミッシングリンクが現代にいるなんて」

魚だけでなく進化の過程にまで詳しいとは驚きだ。俺なら舌を噛みそうな単語をよどみなくしゃべり、真剣に悩んでいる。

そのティクターリクとやらは、ぐでんと寝そべったまま動かなかった。呼吸はしているようだ。ぶっ飛ばしたのは致命傷にはなっていないと思う。

とりあえず、流血沙汰を引き起こす危険生物なのは間違いない。放置しておいていいはずがない。

「保健所かどこかに連絡するか？」

可南に訊いてみた。彼女は一瞬、何が何だかわからないといった顔ををした。少しして、

「ホケンジョ。あ……保健所、か」

思ってもみなかったらしい。眉をしかめて渋い表情になる。

「わたしは、いやだな」

ポツリと言った。ティクターリクの背をそうろと撫でて、大きな目を細める。慈しむ目だ。手つきも非常にやさしい。

やがて、可南は俺を見上げた。潤んで、とろけそうな目で。

いやな予感がした。

そしてそれは的中する。

「この子、わたしたち二人の秘密にしよう」

二人だけの秘密は嬉しいが、これは、ちょっと、いただけない。

「ね？ 甲斐くん、お願い」

そんなふうに手を握ってお願いされても、素直にうなずけなかった。

このティクターリクを飼うということか？ どこで？ どうやって？ 今回、噛み付かれたのが俺だったからまだよかったものの、可南だったり、小さなこどもだったりしたらどうだ？ 女の子の肌に傷が残るのも大変だし、もしかしたら命に危険がふりかかる可能性だってある。毒がないともわからない。俺、数時間後に死ぬかもしれない……。

そんな生物を果たして俺たちの秘密にしてよいものかと迷った。

そのうちに伏せていたティクターリクが身じろぎし、のっそりと四つのヒレで体を持ち上げた。首を傾げるようにして、可南と、俺とを観察するふうな仕草をする。

俺は可南の肩に手をやり、背後に押しやった。ティクターリクと対峙する。

飛び出し気味の目が俺を胡散臭そうに見上げたと思ったら、ふいと横を向いた。そのまま不恰好に歩いて、もしくは這って、元いた洞穴に戻ろうとする。

「あ、行っちゃう……」

可南が呼び止めようとしたが、古生代の生物は振り返りはしなかった。こちらがティクターリクと呼ぼうがなんだろうが、自分がなんて呼ばれているかなど彼はついぞ知らないのだ。当然、飼われることだって望んじやいない。

ティクターリクが完全に洞穴の闇に消えるのに、けっこうな時間がかかった。

「さ、帰ろう」

しゅんとした可南を慰めようと、なるたけ明るく言ってみる。弁当包みをボディバッグに詰め込んで背負い、クーラーボックスをチャリの荷台にくくりつける。

「あいつの存在、秘密にしとくから。保健所に連絡したりしないから」

「……うん」

可南は渋々といった感じだったが、歩き出した俺についてきた。しかし、後ろ髪を引かれている様子なのはよくわかった。ちよくちよく後ろを振り返っては、ほう、と悩ましげなため息をつく。ついさっきまで俺といい雰囲気だったように思えたのに、今や彼女はティクターリクで頭がいっぱいだ。

俺の家に着いても上の空で、釣ってきたイワシはぜんぶ俺が捌いた。てんぷらと南蛮漬けにして、土産に持たす。

「ありがと。じゃ、またね」

可南は心ここにあらずといった調子でふわふわと微笑んで、町へ帰っていった。ばーちゃんズになぜ送っていかないのかと責め立てられたが、俺だってそのつもりだったがやんわりと断られたのだ。

「はああああ」

彼女の姿が見えなくなると、俺は門の前で頭を抱えてうずくまった。携帯番号の交換すらしそびれ、縮まっていたはずの距離がまたあいて。

「せめて今日が、俺の誕生日だってこと言えばよかったな……」

可南から祝福されることは後にも先にもないのだと思うと、とてもなく凹んだ。

何事もなく高一の夏休みが過ぎ去っていった。いや、俺の釣り人生で最高サイズのガシラを釣り上げたり、高波に竿を持っていかれたり、そして、またあのティクターリクを見かけたりした。あの洞穴に可南が現れるのではと期待したのに、そういうことは一度としてなかった。つまり、彼女との再々会は望めなかったのである。

重い足を引きずりながら、始業式のために登校した。可南が転入してくるはずだが、どう顔を合わせていいやらでぜんぜん喜べないので、偶然にも同じクラスだった時、知らず知らずのうちに呻き声を上げていた。

「どっ、どうしたの二見くん」

担任の先生が顔を引きつらせる。廊下ですれ違ったび露骨に俺にビビる若い女の先生だ。何か悪いことをした覚えもないのにな……、そんなに俺は恐ろしく見えるのだろうか。

「具合が悪いので保健室行きます」

返答も待たずに俺は教室を出た。始業式と短いホームルームだけの今日、もういくらも時間はないのにエスケープなんてどういうつもりなんだ、俺。

結局、保健室には行かずに中庭のベンチに座り込んだ。濃い緑に日差しを遮られているので、ここは空気がヒンヤリしている。俺は普段からここへきたいと思っっているのだが、人気の場所らしく休み時間にはいつも先客がいるので、このベンチに掛けるのはじめてだった。

一人きりでぼんやりしていると、時の流れが止まったように感じた。

実際、ふと気づくと夕暮れだった。知らぬ間に寝てしまっていたのかと訝しむぐらい、時間の感覚がなかった。

さらに驚いたことには、となりに可南がいたのである。

「甲斐くん、うちのおばあちゃんみたい」

可南は苦笑して、俺の前に立った。

「おかえり？　もう六時だよ」

「六時……」

ということは、八時間も俺はここで座っていたのか？　記憶が飛んでいるのか？　まだ十六だから酒を飲んだわけでもなく、ましてやボケているわけでもない。

「えっと。いつから、いた？」

問うと、可南は曖昧に笑って背を向けた。長い黒髪と、エンジ色のボックススカートの裾がひらりと控えめに揺れる。

「学校終わってから、ずっと」

「ずっと？」

「うん。時々は別のところ行ってたけど」

なんてことだ。俺は、せっかくきてくれていた可南をほっぽって、長時間トリップしていたということか。本当に体の調子がどこか悪いのかもしれない。ちゃんと保健室に行くべきだったかもしれない。立ち上がろうとすると、左足に激痛が走った。テイクタリークに噛まれたところだ。もはや傷跡すらないし、こんなふうに痛んだことはなかったのに、急にどうしたのだろう。

「大丈夫？」

地べたにしゃがみこんだ俺の背を、可南が心配そうに撫でた。ぴったりと寄り添うようにして顔をのぞきこんでくる。でっかい双眸に俺が映る。もう一度、小さな唇が俺を気遣う。白が眩しい半袖セーラーと、すらんと伸びた腕、スカートからのぞいた小さなひざ小僧。俺と並ぶと、カジキとカクレクマノミほどのギャップがある。クマノミから逃げていたことを、俺は恥じた。

「……ひさしぶり」

痛みをこらえて、精一杯の笑顔を作って言った。

「あれから、元気してた」

「ん。ちょっと、忙しくしてたの」

可南は力なく微笑み、前に会った時よりも少し痩せた頬に左手をあてた。介護のために引越してきたばかりなのに、まもなくおばあさんが亡くなってしまったそうさ。しばらくはこちらに住むらしいが、喪があけたあとはどうするかわからないという。

「そういうわけで、てんぷらのお礼が遅くなってごめんなさい。みんな美味しくいただきました」

ぺこりとお辞儀をしてから、可南は俺の手を取り、立たせてくれた。

足の痛みはすでない。かわりに、可南の憔悴が残る顔を見下ろしていたら、胸のあたりがちくりと痛んだ。

可南は物言いたげに俺を見つめていた。けれど、言葉がでないようだった。何度も深く息を吸っては、細く短く、小刻みに吐く。言葉も息も、うまく外に出せないように見えた。

彼女は、泣いていないに違いない。

それで俺のところに、きたんだ。

「……、可南」

気の利いたセリフの一つや二つありそうなものなのに、俺の口をついて出たのは彼女の名前だけだった。抱きしめてやればよさそうなものなのに、一般の十六歳の男にそんな芸当は無理なのだ。

悩みに悩んでようやく出てきたのは、

「ティクターリクを見にいこうか」

舌を噛まずに言えたのは奇跡だった。

ティクターリクと聞いて、可南が目をますます丸くする。

「まだ、いるかな？」

「先週は見たよ。あの洞穴で」

「行こう！」

可南は俺の手を引き、走り出した。二人とも手ぶらだから身軽だった。

俺の家まで二十分、チャリの二人乗りで五分。薄闇にまぎれようとする洞穴の入り口には、生き物の気配はなかった。懐中電灯を持

ってきたが、うかつに踏み込んでまた噛み付かれるなどするかもしれない。俺たちは慎重になりながら、手を握り合って進んだ。

ティクターリクは、水たまりの前で待ち構えていた。前ヒレで上半身をぐいと上向かせ、俺たちをじっと窺っていた。本当に見れば見るほど奇妙な生き物だ。

夏休みの間、図書館とネットでティクターリクのことを調べた。

二〇〇四年、カナダのエルズミア島で化石が発見される。およそ三億七千万年前、古生代デボン紀後期に存在したと推定される、四肢動物の始祖である。始祖鳥が鳥の始祖で、恐竜とのミッシングリンクであるように、このティクターリクは魚類と両生類の進化の隙間を埋める生物なのだ。つい最近にも、三億九千五百年前のものと思われる四足歩行する動物の足跡の化石が見つかったらしいが、こちらはまだ本体の化石は未発見ということである。

そして、四肢動物の始祖ということは、俺たち人間の始祖でもある。人間の先祖は猿だとばかり思っていたが、進化の歴史を紐解いていくとティクターリクにつながるらしい。ティクターリクは陸に上がった魚なので、人間はもともと魚でもあったと言える。魚が大好きな可南にとって、ティクターリクが特別な存在なのは少しわかる気がした。

「知ってる？ わたしたちってね、お母さんのお腹の中にいるとき、魚だった時期があるのよ」

ティクターリクが水たまりに潜ってゆくのを見届けてから、可南が穏やかに言った。

ドイツの生物学者であり哲学者でもある、ヘッケルの反復説と呼ばれるものだ。説なので否定されたり批判されたりはまああるらしいが、俺はけっこう面白いと思った。中学の時にも、授業でさらっと触れられていた気がする。

子宮の中に発生する羊水は、海水とよく似た成分でできているという。その羊水の中で胎児は、生物の進化の様子を再現するかのような成長をする。細胞から魚類へ、魚類から両生類へ、両生類から

爬虫類、鳥類、哺乳類……。この魚類から両生類に変化する頃、母体は程度の差こそあれツワリに悩まされる。海から陸へ。それは、ものすごい環境の変化だったろう。俺は単純に感心した。

立ち尽くしたままの可南を促し、俺たちは踵を返した。洞穴内は寒いので、自然と腕を組んでいた。可南の肌はきめ細やかで、ひたりとくっつくような感覚がした。

外へ出ると、もうすっかり辺りは暗かった。大きく欠けた白い月が出ていて、夜風は潮を乗せて湿っぽい。

二人でチャリを挟んで歩いた。もう少し、ゆっくりしゃべっていいなかったから。

「ティクターリクは……」

ぽつりと呟く可南の向こうに海が広がっている。暗くて、黒くて、どこまでつづいているのか果てが見えない海。

「ティクターリクは、どうしてあそこにいるのかな」

その疑問に答えられる人間はいらるだろうか。生物学者でもない俺たちには想像することしかできない。想像すら、陳腐なものになりそうでおこがましく思えてしまう。

「魚を持って行ってやったら食べるかもな」

俺が何気なく言った言葉に、可南はさっそく食いついてくる。

「じゃあっ、次の土曜に釣りに行こう」

「これからはタイとカワハギ狙いだな」

「うんっ！ 美味しそうだね」

おばあちゃんはタイの刺身が好物らしいの、とニコニコして話していた可南が急に押し黙る。らしい、というあたり、ずっと離れて暮らしていたことが知れる。それでも彼女が祖母を好いていたのは表情から読み取れる。

「墓前に供えようか。うちのじーちゃんはカワハギの肝和えが好きだった」

肝和えは、じーちゃんの生前は俺には鬼門だった。今でこそ食べられるようになったが、じーちゃんみたいに酒のアテにするのが格

別うまいのだろうと思う。

「一緒に酒飲みたかったなー、じーちゃんと」

「それ、お父さんが聞いたらヤキモチ焼くんじゃない」

「父さんは下戸だから。息子と飲めなかったんで、じーちゃんは俺に期待してたよ」

「お墓で飲んでく？」

「ハタチになってからなー」

俺たちは笑い合って、家路を急いだ。

今日は、ちゃんと可南を家まで送っていった。昔造りの立派な家に入っていく彼女が、誰かに「さかなちゃんおかえりー」と迎えられているのが聞こえてきた。

＊

転入生だともてはやされるのをひたすら拒んでいた可南は、三日目にはもう教室でぼつんと孤立していた。女子版俺、である。まあ俺の場合は見てくれが恐いらしいから仕方がないが、可南はその点クリアしているはずだ。おしゃべりも上手だ。なのに、女子の輪に入っていくともしないし、男子には拒絶反応を示して逃げていってしまう。

教室で話しかけるのは照れくさいので、可南が教室を出ていったら、さりげなく後を追うことにしていた。中庭は空いていないので、たいてい北校舎の裏の焼却炉の、そのまた裏が落ち合い場所だった。殺風景きわまりない空き地で、昼休みにここにやってくる生徒はまれだ。

俺と可南は隣りあって腰をおろすと、それぞれの弁当を食べた。可南の弁当箱は明らかに大きく、自分で作ったという玉子焼きなりツミレなり、最初に俺の弁当のふたに分けてくれた。母さんの弁当はばーちゃんの弁当よりずっとバラエティにとんでいたが、いかにせん料理の腕がまずいので、可南の差し入れは単純にうれしい。

連日のデボン紀の話に飽きることはなかったが、ちょっと会話が途切れたところで、先日の「さかなちゃんおかえり」について訊いてみることにした。半ば地雷かな、と思わないでもなかったが、意外にも可南はあっさりと答えた。

「小さい頃に命名されちゃって。いまだにそう呼ぶ人もいるの」

「じゃあ、俺もそう呼んだほうがいい？」

「えっ、それはいや。やめてよー」

可南はけたけたと笑っていたから、その時、俺はなんら深く考えなかった。

そこに根深いトラウマがあろうなどとは、露ほどにも思わなかったのである。

土曜日は快晴だった。が、予報ではにわか雨があるでしょうとのことだった。

俺の家の裏でも釣れる時期なので、待ち合わせは我が家だった。迎えに行くつもりだったが、昨晚の携帯メールで家の人が車を出してくれることになったと連絡があった。

今日の昼飯は冷麺でもふるまおうと思い、材料を短冊切りにしていたところにインターホンが鳴った。大声で返事をしつつ、きゅうりを手早く切り終わってタッパーに入れ、冷蔵庫にしまう。エプロンをはぎとりながら玄関へ向かう。

「おはよう」

うきうきしてドアをあけた先に、たしかに可南はいた。けれど、

「おは……、おはようなのだうお」

恐ろしく低いテンションで斜め下を向きながら妙な挨拶をした彼女は、青い色をした、顔をすっぽりと覆う帽子をかぶっていた。薄桃色の花柄チュニックと半端丈の紺色レギンス、ビーズのペンダントや華奢なミュールに不似合いで季節外れなボア地の帽子は、よく見るまでもなくマンボウだった。

「はーいおはようございますはじめましてっ！」

凍りつく俺と可南の間に、すこぶる脳天気な男の声が割り込んできた。

「僕、さかなちゃんのいとこで津々井伊織^{いおり}、と申します。大学生やっています！　きみが二見甲斐くんですね？　おーきいなあ。よろしくー」

可南のいとこのわりに細目な伊織さんとやらは、俺の手をつかんでぶんぶん振った。そして、ドン引きした俺を一瞬、鋭い目で睨んだかと思うと、これみよがしに可南の肩を抱きよせた。

「僕のさかなちゃんに手を出したら許さないよ？」

凄みのある陽気な声というものをはじめて聞いた。聞き間違いか
と思ったほどだ。

手を出したら、許さない。

僕の、さかなちゃん？

「えーと、可南？」

どんよりしている彼女に伺いをたててみようとしたが、伊織さん
に阻まれた。

「可南なんて呼ばないでくださいねー。さかなちゃんはさかなちゃん
です。こういうキャラクターなんですから、そこんどこわきまえ
てくださいね」

「いや、どう見ても本人いやがってるんですけど」

「照れ屋なだけなんです。本当は学校にもかぶっていききたいのに、
できない。ああ切ないジレンマ〜」

俺は可南の腕をつかみ、玄関に引き入れてドアを閉めて鍵をかけ
た。ドアががすがす叩かれている。今のうちに本音を聞き出そうと
可南を見れば、ぼろぼろと涙をこぼしてチュニツクの裾を握り締め
ていた。

これはもはやイジメだ。伊織の野郎、いい年して親戚の女の子を
泣かしてどうするのだ！

「裏から逃げよう」

帽子を外してやり、靴を脱ぐのを待つのももどかしくて、俺は可
南を抱き上げた。勝手口からだど玄関先から見えてしまうので、ば
ーちゃんズがのんびりしている居間の窓から脱出することにする。
縁が出ているのでサンダルも置いてある。

「甲斐やあ、おまんじゅう食べていかなかね」

「甲斐、女の子を泣かしちゃあいかんよ」

まんじゅうを食べてる場合じゃないし、俺が泣かしてるわけでも
ないし！

俺はばーちゃんズを適当にあしらって窓をあけた。吹きさらしだ
ったゴムサンダルは弾力がなくなっていて歩きにくいが、四の五の

言っていない。

海岸に降り、右手の磯方面へ走っていった。海に突き出した岬を目指す。岬の先へ行くには、地元民しか知り得ない入り口を通らなければならぬ。そこまで逃げおおせれば、伊織は追ってこられない。

干潮の磯は生き物たちであふれていた。伊織の姿が見えた気もするけれど、それでも豆粒状態だ。足元のカニのほうがかい。

途中から可南も自分で歩きはじめた。手をつなぐ。時々よろける彼女を助けながら、俺がリードする。

波打ち際ではじける水の玉が太陽の光を照り返しては、きらきらと消えていく。徐々々に、可南に笑顔が戻ってくる。

沖の水平線は空との境にはっきりと走り、入道雲の白さは青の中に際立っていた。天気予報どおり、いずれにわか雨が降るだろう。

岬のたもとの地肌にまだ蕾のシオギクが群生しているのを横目に、人がやっと一人通れるほどの登り道を見つけた。ここにも木々が覆い繁っているので、それと思って探さなければ何も道はないように見える。

最初は思い切り屈んで通り抜けなければならないが、そのあとはもう楽なものだ。しばらく誰も通っていないのだろう、ところどころ踏み均されていなくてサンダルやミュールでは難儀したけれど、五分もかからずに一般の参道に出た。

岬にはえびす神社がある。とはいえ、地元民しか訪れないような小さな社なので、参道もただの砂利道だ。俺たちはその道を神社とは反対方向へ急ぐ。

「えびすさんじゃ行き止まりになっちまうからな」

「じゃあ、どこへ行くの」

「テイクタリクの洞穴」

あそこであれば、気味悪がってまず誰も寄り付かない。洞穴に隠れていさえすれば、伊織をやりすごすのもたやすい。

「あいつはまだ磯にいるだろ。見つからずに行けるよ」

振り向くと、入道雲がぐんぐん勢力を伸ばしてきていた。ティクターリクの洞穴に着く頃には、地を揺るがすような低音の雷鳴が響きはじめていた。

なんの照明も持っていないので、入り口付近で隠れているつもりだった。けれど雨風が強くなり、もう少し奥へ入らざるをえなくな

った。
付近にティクターリクの気配はなかったが、潜んでいるのは彼だけとは限らない。俺がケガをするぶんには構わないが、可南だけは守らなければ。

「……ここ、どこまで続いているのかな」

薄暗がりの中で可南がぼつりと尋ねた。

「ティクターリクは、ここに住んでいるのよね？　ほかにいるのかな？」

普段の調子を取り戻したらしく、興味津々といった風情で奥のほうを覗き込む。

「それって、確かめに行くつもり？」

そうなのだろうなと思いつつ、一応、確認をとってみる。

可南はもしもじしたあと、こくと頷いた。なんて好奇心旺盛な女の子なのだろう。俺でさえ真っ暗闇の洞穴を探検するなんてことは怖いと思うのに。

「これ、これねっ、光るんだよ」

取り繕うように、可南はペンダントロケットを掲げてみせた。頼りない薄青色の光が、可南の目を浮かび上がらせる。とてもとても闇を照らす威力はない。そのことは可南も心得ているようで、肩を落としてしょんぼりする。

しばしの沈黙のあと、俺たちは壁にもたれかかるようにして腰をおろした。堅い土の壁はひんやりとすべすべしていて、元はなんのために掘られたのだろうと考えた。聞いた話ではじーちゃんがこどもの頃にはすでにあったはずだ。炭鉱跡や、戦時中の魚雷格納庫というわけでもないらしい。小学校の時の郷土史の授業でも取り上げ

られたことはなかったように思う。

横穴自体はよく見かけていたものなのに、ただの横穴としてしか捉えていなかったことを今になって悔やんだ。

はつきりとしているのは、テイクターリクと思われる生物が生息している、きわめて妙な場所だということである。なんの装備もなしに、気軽に踏み込んでいいところではない。

「なあ可南、気になるのはわかるけど、せめて今日はやめとこう？」

「……でも」

「でもない」

可南はまだ何か言いたげな顔をしている。強情なコだ。

恐いんでしょ、と挑発されたら素直に頷いてやろうと覚悟していると、

「甲斐くん」

名前を呼ばれて気が緩んだ隙に、ぎゅう、と左腕を抱きしめられた。

「なっなにっ」

「甲斐くんは、伊織ちゃんみたいにならないよね？」

至近距離で見つめられて、思わず俺はのけぞった。そんな俺に追い打ちをかけるように、可南は膝で立ち、にじり寄ってくる。俺の左足をまたいで、シャツの胸を両手でつかむ。

「伊織ちゃん、昔はあんなんじゃなかった。釣りを教えてくれたのも伊織ちゃんだよ。わたしの趣味にも付き合ってくれて、なんでも言うこと聞いてくれて。でも突然、人が変わったみたいに、わたしのこと拒否したの。そして、あの帽子をかぶれて――」

中学の三年間と、高一の一学期を、「さかなちゃん」として過ごすことを強要されたという。伊織とはいとこ同士で、家も近所だったそう。

はじめは優しいお兄ちゃんだったのに、可南に突飛なキャラクターを押し付けるようになったということか。さすがに俺は、そんなふうにはならないと思いたいのだが……。

「俺も伊織みたいになると思った？　なんで？」

訊くと、可南は目を潤ませて首を振った。小さな子がイヤイヤをする感じだ。

「甲斐くんといると、すごく心地よくて。うん、でも……そうだね、甲斐くんは優しいけど、ダメなことはダメって言うてくれるよね」

「伊織はぜんぶ受け入れてくれてたんだ？」

負けた気がして、少々傷つきながら俺は言葉を返す。

「伊織のこと、……好きだった？」

可南は唇を噛み、頷くでもなく、否定もしなかった。これ以上はやめておこう。俺がツライ。

俺から離れ、可南は膝を抱えてちんまりと座り込んだ。顔色をうかがおうとすると、ふいと向こうを向いてしまう。無理にこちらを向かせる気にもならず、俺は差しだしかけた手でこぶしをつくり、ぐっと腹にあてた。

どのくらい二人でそっぽを向きあっていただろう。

そろそろ昼時かな、という腹具合になって、俺は身じろぎをした。ここからでは外がどんな天気かわからない。にわか雨ならばもうとつくに過ぎ去っていてもいい頃だ。

「もう伊織も諦めてるだろ。帰ろう」

「……うん」

可南は少し泣いていたようだった。上げた顔がぼんやりとして、まぶたが腫れぼったい。

それには気付かなかったふりをして、俺は手を差し出した。可南は躊躇したらしい。おどおどと手を重ねてきたので、わざと力を入れて握ってやった。

昔、伊織のことが好きだったとしても関係ない。

今、そばにいるのは俺なんだから。

「痛いよ、甲斐くん」

可南がかぼそい声で咎めるのを、ちょっといじわるな気持ちで無視をした。

俺が怒っていると勘違いしたらしく、可南は俯いて、ひいんと弱々しい声を漏らした。うわ、すごい罪悪感。

「ごめん」

すぐさま謝る俺は意気地がないのだろうか？

ソフトに手をつなぎ直して、洞穴の外へ出た。

――眩しい。太古の昔、長らく水中で過ごしていた生物が陸上に出た時の衝撃とは比べようもないだろうが、太陽があまりにも元気なので目眩がした。

静かに深呼吸をしたあと、大きな伸びをして反り返り、ティクターリクの洞窟を見る。

「――、あ」

こちらを見つめている奇妙な生物がいたような気がした。しかし、体勢をととのえて振り返った時にはもう姿はなかった。

可南はまったく気がつかなかったらしく、口惜しそうに何度も何度も洞穴を覗いた。

「ねえ、甲斐くん」

「なに」

「今度、探検しにこようね？」

「あー……。きちんと下調べして、準備してからな」

「うん」

雨上がりの帰り道、俺たちの足はどろどろだった。俺のボロいサンドダルは問題ないが、可南のかわいらしいミュールは目も当てられないほどに汚れてしまっている。

洗えばいいよと言う可南に、俺は半ば勢いで新しいのをプレゼントすると宣言してしまった。すると、

「誕生日は冬だから、ブーツのほうがいいな」

可南は肩をすくめて笑った。ちゃっかりしている。

＊

その後聞いた話によると、かつて可南と伊織は山で遭難したことがあるそうだ。可南が小学校を卒業して、中学生になる前の春休みのことだ。

天然のイワナを求めて川の最上流を目指したはいいが、そんな源流域に年端も行かないこどもだけで入渓していいはずがない。しかし、年下のいところにベタ甘だった当時の伊織は、じゅうぶん危険を承知していたはずなのに、可南の好奇心の赴くままに付き合った。結果、遭難したあぐくに年上だった伊織はこっぴどく絞られたように、以降、人が変わったとのことである。可南に振り回された伊織に同情すべきか迷うところだ。

伊織が大学がはじまるからと巣に帰っていくと、心底ホッとした。こちらに滞在中、彼はマンボウの帽子を抱えて執拗に可南を追いついていたのだ。

可南は可南で、彼の変貌の原因は自分にあることを認めていた。だから三年と数カ月、黙って「さかなちゃん」を演じていたのだろう。いまだに、気を抜くと語尾に「うお」がついてしまうのだから根は深い。

でもいずれば、そのわだかまりも解ける日がくるだろう。そう思いたい。

おばあさんの四十九日が過ぎる頃、可南は学校でも、少しずつ周りに打ち解けはじめていた。俺と付き合っているという噂が立つと、恥ずかしそうにしていたが否定はしなかった。

おかげで、俺はまた男どもにいじられる日々がはじまった。なんでこう恋愛がからむと、俺みたいな見てくれの恐いやつでも絡みやすくなるんだろうな？

でも、悪くはない。教室に一人きりでいるよりは、理由はどうであれ、仲間とじゃれ合う毎日は楽しい。

ふと、洞穴のテイクタリクのことを思い出す。魚類と両生類のミッシングリンクは――俺と可南の架け橋となったあいつは、今も

一匹ぽっちでいるのだろうか？

いつのまにかあの洞穴は途中でふさがっていて、もはや彼に遭遇することはなかった。永遠に可南と俺、二人だけの秘密になってしまったのだ。

＊おわり＊

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6194y/>

魚ガール！

2011年11月26日08時54分発行